集団状況における多元的無知

加納啓太¹・神信人²・松本良恵³

(¹淑徳大学大学院総合福祉研究科・²淑徳大学総合福祉学部・³玉川大学脳科学研究所)

キーワード：多元的無知、対応バイアス、集団

Pluralistic ignorance in a group situation

Keita KANO¹, Nobuhito JIN¹, Yoshie MATSUMOTO²

(¹Graduate School of Integrated Human and Social Welfare Studies, Shukutoku Univ. ²Brain Science Institute, Tamagawa Univ.)

Key Words: Pluralistic ignorance, Correspondence bias, Group

目 的

集団が多数の成員にとって望ましくない事態に陥る要因の1つに、実は皆同じ態度を持っているにも関わらず、自分とは違う態度を皆が持っていると誤推測してしまう多元的無知があげられる。岩谷・村本(2015)は、他者が消極的に選択したものをその人の選好だと誤推測してしまう対応バイアスが多元的無知を生起させることを、2者間の意思決定場面を用いて検証した。この研究ではさらに、誤推測した選好に沿って、相手に配慮する行動が生じることも報告されている。しかし、多元的無知が本来問題とされるのは相手への配慮といったものではなく、集団選好から逸脱すると周囲から否定的な扱いを受けるという恐れから、誤推測された集団選好に沿った行動を仕方なくしてしまうという事態であろう。この場合、たとえ成員間での意見交換の機会があっても、本心を明かせず、それぞれが内心では望まない行動を仕方なくとっている状況が維持されると考えられる。集団が望ましくない事態に陥る過程を明らかにするには、2者間ではなく、こうした集団での多元的無知の生起について検討する必要がある。

集団状況で生起する多元的無知としては、ある考え方や態度に対し、総論的には同意しないがその態度の論拠の一部を構成する見解に同意している人々を見て、総論的にも同意していると誤推測してしまうことが考えられる。その例に、いじめ状況があげられる。いじめの加害者が、いじめの被害者の実際に行った望ましくない行為を非難する発言をした場合、周囲の成員は、被害者に対し全般としては否定的感情を持たないとしても、非難されてしかるべき行為であったことは事実であるため、その発言に同意してしまうことがある。すると、成員それぞれが、周囲の皆は被害者に対して否定的感情を抱いていると誤推測してしまうと考えられる。それにより、加害行為の制止といった推測した集団選好に反する行為ができなくなってしまうだろう。

そこで本研究では、このような事実在即した部分的見解が示された場合、その見解への周囲の同意から成員は集団全体の選好を誤推測し、推測した集団選好に沿った態度へ実際に流されてしまうのか検討を行う。

本研究にはもう1つ目的がある。それは、集会的な誤推測が起ってしまった際にそれを覆すにはどうすればよいかという問題にアプローチすることである。そのために個人として取りうる対処方略についての検討も試みる。

方 法

5人の参加者集団に、集団の追加メンバーを2名(A・B)の架空の候補者から1名選択するという課題を行わせた。

各参加者は個室内のPCを介し、他の個室にいる参加者と、候補者に関する意見交換を行った上で追加メンバーを選択した。意見交換の前には、Aの方がよい印象になるよう操作された候補者プロフィールを参加者に読ませ、その後どちらを追加メンバーとするのが望ましいか個人的に選択させていた。意見交換は、各参加者による候補どちらかへの印象を述べる提言と、その提言への他の参加者による同意か不同意の表明

からなっており、他の参加者が候補者にどのような印象を持っているか探ることができた。意見交換終了後、集団としてどちらを追加メンバーにするのがよいか各参加者に選択させた。選択に先立ち、全員の選択が一致すると実験謝金が増額され、不一致の場合は一致を阻んだと思われる者を投票で選び、それ以外の参加者で再度全員一致を目指すことを指示していた。この実験では、意見交換で最初に提言を行う参加者はAに否定的見解を示すサクラだった。その提言内容には、「Aはグループに入れたくない」という統制条件と、プロフィールにも書かれていた「Aは約束を破ることがある」という部分的事実条件を設定し、前者より後者で、個人では望まないBを選択する者が多くなることを検証した。

集会的な誤推測への対処方略には、自分の本心に沿った意見を周囲に同意させることと、自分の本心と逆の態度を持つ成員からの否定的反応を回避することが求められる。これらを満たす方法として、否定困難な部分的見解には同意しつつ、同時に自分の本心に沿った事実に基づく部分的見解を示すことが考えられる。具体的には、部分的事実条件で「約束を破る」という提言に皆が同意したとしても、次の成員が、プロフィールにある別の事実を加えて「Aは約束を破るけど、疲れている人にやさしい」といった提言をすれば、他成員は同意を示すことができ、集団選好の誤推測は修正されると予測される。そこで本研究は、部分的事実条件の手続きにこの発言をする2人目のサクラを加えた両面提示条件も設定し、Bを選択する者がどれだけ減少するかについても検討した。

結果・考察

分析は、個人選択で全員がAを選んでいた全14グループを対象とした。意見交換後の選択(表1)は、統制条件では参加者全員がAを選択していたのに対し、部分的事実条件では4割以上の参加者がBを選択していた。この結果から、事実在即した部分的見解が示されると、その見解への周囲の同意から集団選好を誤推測し、実際に推測した集団選好に沿った態度へ流されてしまうことが示唆された。

両面提示条件は、部分的事実条件と比べBの選択比率率が20ポイント以上少なく、否定困難な部分的見解に同意しながら事実に基づく本心に沿った部分的見解を示すという方略には、一定の効果がある可能性が示唆された。

引用文献

岩谷舟真・村本由紀子(2015). 多元的無知の選好因とその帰結:個人の認知・行動的側面の実験的検討 社会心理学研究 31 101-111
 <謝辞>柳瀬雄飛氏と宮崎拓氏の実験への多大な貢献に感謝いたします。

表1 意見交換後の選択の分布

選択 A B	統制	部分的事実	選択 A B	両面事実
4 0	4 集団	3 集団	3 0	3 集団
3 1			2 1	
2 2			1 2	
1 3			0 3	
0 4				
計	4 集団	6 集団		4 集団
B 選択	0%	42%		17%